

森ノ宮医療大学卒業式訓示

卒業生の皆様、ご卒業、誠におめでとうございます。そして、御子様の学生生活を支えてこられたご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。また、本日の卒業式挙行にあたり、御来賓の皆様におかれましては、平素の当大学に対する御指導・御支援に感謝申し上げますとともに本日の御臨席まことにありがとうございます。

私はこの森ノ宮医療大学に学長として赴任し、ちょうど4年になります。すなわち皆様とともに4年間歩んできたわけです。看護学科は最初の第一期生が卒業することになります。4年前、この森ノ宮医療大学に入学された皆様は、当時まだまだ幼さの残る若者でした。しかし、入学式で垣間見た、皆様の未来への希望に輝いていた眼差しは今でも強く印象に残っております。そして4年という月日の中で、優れた師から多くを学び、学友と様々な経験をし、人間としてあるいは医療人を目指す学生として大きく成長されたことと思います。本日、さらに輝きを増し、自信に満ちた皆様を見ることができたことは、誠に感無量であり、森ノ宮医療大学教員・職員一同の誇りでもあります。これからいよいよ、社会という大海原で、学びと経験の真価が問われます。皆様ならその荒波をしっかり乗り越えていけると確信しております。どうか、自信を持って社会に羽ばたいていただきたいと思えます。

さて、これから皆様がかかわっていく医学・医療の世界は、その発展の歩みがとどまることはありません。まさに日進月歩、加速度的に進歩していると言えるでしょう。皆様も記憶されていることと思いますが、世界中を驚かせた iPS 細胞の発見で山中伸弥先生がノーベル賞を授与されたのは2年前のことでした。今まで遠い未来の話と思っていた再生医療の実用化が、もうすぐそこまでやってきていることを実感しましたが、その後わずか2年の中で、予想をはるかに超えるスピードで研究は発展しています。iPS 細胞からの網膜再生に成功し、目の難病を患う女性患者に再生された網膜細胞の移植が行われ、既に人間に臨床応用する段階に入りました。また、今年に入ってから、iPS 細胞から軟骨細胞の再生に成功したとのニュースがありました。今後、さまざまな臓器の再生が成功し、臨床応用されていくでしょう。医学研究者たちのたゆまぬ努力には見習うべきものがあります。

このように歩みを止めることのない研究者たちを突き動かしているものは何でしょうか。それは、今皆様が感じていることと同じものではないでしょうか。すなわち、命を慈しみ、病気で苦しむ患者によりそいたい、一人でも多くの患者を救いたい、患者の笑顔が見たい・・・研究でも臨床現場でも、その思いは共通していると思います。医療人の基盤とも言えるこの思いは、研究分野であろうと、臨床現場であろうと、違いはありません。忙しい日々の仕事の中にあれば、ややもすると忘れがちな思いではありますが、どうか、今一

度その思いをしっかりと心に刻み込み、患者に寄り添える医療人であって欲しいと切望する次第です。古今東西を問わず、時代が異なろうとも、文化が異なろうとも、人種が異なろうとも、宗教が異なろうとも、医療人のこの思いは共通しています。本学でも、「いのちへの愛と畏敬」を学園の精神とし、「人に寄り添い幸せをねがう」、これを基本理念としています。自信を失いそうになった時、心が折れそうになった時、医療人としての目的を失いかけた時、もう一度この思いを新たにすれば、苦境も必ず乗り越えることができることと信じております。そして、その思いが、病に苦しむ方々の笑顔につながった時、医療人としてこの上ない喜びを感じ、そしてその患者の笑顔は、皆様をより一層成長させることと思えます。この思いを胸に、患者によりそい、そしてそのことで皆様自身も豊かな人生を歩まれることを願ってやみません。

さて、本日、皆様はすべての課程をみごと修了し、晴れて卒業を迎えました。しかし、これは決してゴールではなく、スタートです。皆さんはようやく医療人としてスタートラインに立たれたところです。今皆様の胸には、希望だけではなく、不安やプレッシャーもあることでしょう。しかし、不安やプレッシャーをバネに大きく飛躍してください。皆様には、これまでの学び・培った経験があります。自信を持って前に進んでください。そして、皆さんの母校、森ノ宮医療大学の扉はいつでも大きく開いていることも忘れないでください。困難に直面された時、いつでも母校は皆様に寄り添います。

今後の皆様の大きな飛躍と素晴らしい人生を祈念し、ご卒業のお祝いの言葉とさせていただきます。ご卒業、誠におめでとうございます。

平成 27 年 3 月 12 日

森ノ宮医療大学 学長 荻原 俊男